≪ザーンダイクの散策と見所≫

ようこそ“ザーンダイク”へ！！

ザーンダイクご訪問が良き思い出となります様、街を案内させて頂きます。先ずザーンダイク水門から出発しますが、この水門は、1727年に築かれ1996年に改修後、現在、二十数人の男達が交代で管理に当たっています。橋を過ぎると“ザーンダイク鉄道駅”真っ直ぐな道がありますが、この道の最初の通りを右に曲がって散策するのがお薦めです。その先の”教区牧師の庭”として知られる“ザーンダイク地区”には、緑色に塗られた絵の様な家々が建っていますが、ここは、1709年から1912年まで独自の規律と慣習で守られていた為、1980年代の地域開発から生き残りました。オルレ村の中道沿い“カス・プラフト33番地”にある切り妻の小屋根と破風を持った家は素敵ですよ。更に、村の一角には“マーケラース”という屋根同志が繋がった建物があり、夫々に異なる形をしています。ここを離れ、もと来た道を戻ると、水門近くの橋に出ますが、そこを左に曲がり”ラーヘダイク“に沿って行くと、自慢の家が並んでいます。それらの建築的特徴を挙げてみましょう。

・**<家屋ナンバー 214；** ザーンデイクの最古の木製のコテージ。かつて、ベーカリーでは今スタジオとして使用。プロパティの履歴情報ボックスに表示されます。

・**<家屋ナンバー146>**：1832年の建造。立派な階段とダイアモンド・ヘッド・パネル呼ばれる銘板の付いたドアーを持つ家で、ここから“穀類の殻剥き風車地帯”と呼ばれるザーンダイクの一角が始まりますが、17世紀に穀類の殻剥きと製粉用風車が作られて以来、そう呼ばれる様になりました。

・**<家屋ナンバー134>**：昔は、ココアとチョコレートの工場でしたが、今は、石造りの平屋となっています。

・**<家屋ナンバー132>**：1855年建造の緑色に塗られた大きな家で、最初の木造家屋群の一つです。二階建てになっているのが自慢です。

・**<家屋ナンバー122>**：建造は、18世紀前半まで遡ります。ファサードてっぺんの造りは、ルイ14世時代調の花瓶の形をしており、もう一つの特徴がポルティコと呼ばれる屋根付きの柱廊玄関で、渦巻き模様と花柄で装飾されたイオニア式の二本の柱が付いています。

・**<家屋ナンバー114>**：建造は同じく18世紀前半まで遡り、花柄で一杯に装飾の施された花瓶が特徴的です。

・**<家屋ナンバー112>**：昔、ここにザーンダイクの市長が住まいしていましたが、そのファサードには、三角の破風が乗っています。

・**<家屋ナンバー104>**：1752年の建造で、以前のザーンダイク町役場です。見事な装飾が施された議会会議室がありますが、残念ながら見学出来ません。外観は、イオニア様式の柱を持つ建物で、入口脇の壁は何で出来ているか、それが砂岩と思われるならば、間違いで、実は、銀砂と銀を含む砂をペンキに混ぜて木材の上に塗ってあるの欄間窓には、用心深さと警戒を象徴する雄鶏と鶴がしっかりと石に止まっている姿がローマ人の商業神マーキュリーと海神ネプチューンの象徴によって囲まれているのを見ることが出来ます。

・通りを横切って行くと、“彫刻の庭”と呼ばれる場所に出ますが、ここは、1804年製作の“朝”、“昼”、“夕”、“夜”を表す彫刻が施された“織工の家”と呼ばれる家があります。この工房は、1650年に建造され19世紀には個人宅として使用されていました。現在は、展示場となっています。

・**<家屋ナンバー96>**：ドアーの上の綿密な細工が為された特徴的な窓が特徴的です。コインを撒く幸運の女神の気前の良さをご覧下さい。また、海神ネプチューンの三叉の槍と商業神マーキュリーの杖（二匹の蛇が巻き付いている杖）も見付けて下さい。この散策コースの途中では、家々のドアーの上の窓に、“商い”と“海運”を表す象徴を度々目にすることが出来ます。

・**<家屋ナンバー92>**通り壁に小さなくぐり戸がありますが、この小屋の住人が亡くなった時、この小さな戸口は、その亡骸を運び出すのに使われました。域一帯（ザーンストリーク）では、この様な特別なドアーが同じ目的で使用されていました。

・**<家屋ナンバー90>**：この家の欄間窓には、ミツバチの巣箱が描かれていますが、これは、前の住人と関係があり、ここが蜂蜜採集農家であることを示しています。蜂蜜は今でも飲料や食品に使われる良く知られた素材ですね。

・**<家屋ナンバー80>**：1706年の建造で“ホーニフブリートハウス”と呼ばれ、イオニア様式の柱が付いた商家の造りとなっています。今は、小さな博物館で、紙漉きの“ブリート・デ・イェーガー家”の人達と会うことが出来ます。周辺の家屋の昔の銘板は壊れてしまって有りません。

・家屋ナンバー70と68の家の間に“アルクマール パケット”という船着場があり、フェリーが“アルクマール”の町と“ザーン地区”の間を往来していました。<家屋ナンバー68>の家は、“ラーヘダイク　”で最も間口の狭い家で幅が3．2メートルしかなく、昔は”フェルカーデ：有名なお菓子屋“のお店でした。大きな石造りの建物の向こうは、嘗ての“村の公証人の家”がありますが、そこには3台の旧式の消防車（手動式）がザーンダイク市によって保管されています。通りの向こうに小さな家が見えますが、これもこの地区固有の眺めです。**「お楽しみ頂けましたか？ 良い旅を！！」**